

わが国における海の親水の概念と空間構成に関する研究*

—潮入り庭園を事例として—

*A Study on the Concept and Composition of SHIN-SUI on the Ocean in SHIO-IRI Gardens**

— Case Study of SHIO-IRI Gardens —

田島洋輔**, 横内憲久***, 岡田智秀***

By Yosuke TAJIMA**, Norihisa YOKOUCHI***, Tomohide OKADA***

1. 研究背景および目的

わが国の都市臨海部では、1970年に策定された東京都「海上公園構想」¹⁾を契機として、いわゆる親水公園整備が各地で行われてきた。しかし、先行研究²⁾³⁾によれば親水空間整備における「親水」の概念は、抽象的であるとともに多様化してきており、現状の整備をみても、噴水やジャブジャブ池など臨海部でなくとも成立する空間整備が行われていることから、臨海部の特性を十分に活用しているとは言いがたい。これらのことをふまえると、現状の親水空間整備において、よってたつ「親水」の概念はいまだ確立していないものといえよう。

一方、江戸時代の臨海部では、諸大名の娯楽の場として「潮入り庭園」¹⁾が各地で造成されていた。この庭園は、海の特性が取り入れられており、その空間的魅力の高さから、作庭当時から現在に至るまで人々に継承されている事例も少なくない。これより「潮入り庭園」では、海の特性を活用することで人と水との好ましい関係を築き上げてきたと考える。

そこで本研究では、今後の親水空間整備のあり方に示唆を与えるため、「潮入り庭園」を対象に人と水との関わりを現地踏査および文献調査を通じて把握することで、わが国の海における「親水」の概念とその空間的特徴を明らかにする。

2. 研究方法

わが国で現存する「潮入り庭園」は全国で8事例²⁾あるが、そのうち当該庭園に関する文献資料等

の保存状況が比較的良好な『浜離宮恩賜庭園』(以下『浜離宮』)『清澄庭園』『諸戸氏庭園』『養翠園』『縮景園』の5事例を研究対象とする(図-1)。そしてこれらについて、人と水とが密接に関わると考えられる当該庭園の利用行為および空間的特徴を把握するため、5事例に関する文献および庭園図面・周辺地図^{4)~16)}を分析し、その結果を通じて海の「親水」の概念を明らかにする。次に、その「親水」の概念を成り立たせている要因を捉えるため、人間の視知覚特性³⁾である視距離とその意味について考察を行う。

3. 結果および考察

表-1は、上述した方法により各事例を通じて抽出した「利用行為」ごとに、その「視点場」「視対象」「視距離」などを示したものである。以降は、これらをもとに考察を行う。

(1) 建築物の鑑賞

これは、庭内の主要な建築物とその倒景が一体となった景観を眺める行為である。表-1に示す『浜離宮』では、「(3)お伝え橋」を視点場として、魅力的な眺めの対象とされる「中島の茶屋」(写真-1)を愛でていたとされる。この視距離は84mであり、「建築物として識別できる限界距離¹⁷⁾」(95m)に含まれるため、「中島の茶屋」が印象深く眺められる状況にあったといえる。さらに、「お伝え橋」と「中島の茶屋」の間に介在する水面に映し出された倒景も評価されていた¹⁸⁾ことをふまえると、建築物の魅力は水面によって、より一層高められていたといえよう。

(2) 山並みの鑑賞

これは、庭外の海や大河川を介して対岸や周辺の山並みなどを自己の庭園に取り込む借景を楽しむ行為である。表-1に示す『養翠園』では、「(6)養翠亭」を視点場として、「天神山」を眺めの対象としてい

*Keywords: 親水計画, 公園・緑地, 景観, 潮入り庭園

**学生会員, 日本大学大学院理工学研究科海洋建築工学専攻

***正会員, 工博, 日本大学理工学部海洋建築工学科

(〒274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1, Tel&Fax 047-469-5427)

庭園名称	作庭年代	現況位置図	庭園配置図
	敷地面積		
	現住所		
	庭園の概要		
『浜離宮』	江戸中期(推定 1707 年)		
	約 250,000m ²		
	東京都中央区浜離宮 浜離宮は約 340 年前、4代将軍徳川家綱が1万5千坪の埋立て用地を弟の綱重に与えたことに始まる。東京湾に面しており海から直接海水を導水する形式を取っている。現在では都内で唯一、潮の干満の影響を受ける潮入りの池を持つ。また、1952 年にわが国で5事例しか例をみない特別名勝および特別史跡の2重指定を受けている。		
『清澄庭園』	明治 11 年(1878 年)		
	当時約 97,200m ² (現在:81,000m ²)		
	東京都江東区清澄 大名庭園であった清澄町の土地約三万坪を 1878 年に三菱財閥の創業者である岩崎弥太郎が買い取ったことから始まる。もともと湿地にあった水溜りを池泉に活用していることから、水を供給する手段がなかった。このため、感潮河川である隅田川から導水することで潮入りの庭園となった。大正 13 年(1924 年)に西側の一部が東京市に寄与されたことで現在の規模となる。		
『諸戸氏庭園』	明治 24 年~大正 2 年(1891~1913 年)		
	約 10,480m ²		
	三重県桑名市太一丸 本来は、山田氏林泉と呼ばれる極小の庭園であったが、1885 年(1888 年という説もある)に諸戸清六が周辺の水田を埋立てることで現在の規模となる。敷地は感潮河川である揖斐川の右岸に位置し、平坦で起伏の少ない沖積低地に造成されている。庭園周辺に整備された溝渠により、揖斐川から導水することで潮入りの庭園となる。		
『養翠園』	江戸後期(推定 1819 年)		
	約 33,000m ²		
	和歌山県和歌山市西浜 紀州藩 10 代徳川治宝が 1819 年に西浜御殿に居を移して間もなく、西浜に程近い水軒御用地に新たに造成したのが養翠園である。敷地は和阿山平野にあり、前面には小規模な大浦湾を有していることから、周辺への見通しが良い。庭園の大部分には三浦樋門と船蔵樋門の2箇所から海水を引き込むことで潮入りの池が成立する。		
『縮景園』	江戸前期(推定 1620 年)		
	約 51,000m ²		
	広島県広島市中区 縮景園は広島藩藩主浅野長晟が広島城入城の翌年(1620 年)に縮景園築成を命じたことに始まる。敷地は広島城の東方 600m、感潮河川である太田川の分流神田川の右岸に位置する。1945 年、原爆により壊滅状態になったが県教育委員会によって現状まで復元された。		

図-1 各庭園に関する概要および主な空間構成要素とその配置

【注意】「庭園配置図」に示す数値は表-1「視点場」に示す数値と対応。

たとされる(写真-2)。この視距離は約840mであり、一般的に「個々の木々がテクスチャーの単位になり、単体の山々ではなく地形をかたちづくる山並みとして視認される中景域」(約400m～約2km)¹⁷⁾に含まれることから、山の稜線が際立って視認される状況にあるといえる。また、「養翠亭」と「天神山」との間に水面が介在しており視線の障害要因となる建築物等がほとんど存在しないため、周辺の山並みへの見通しが良く、借景が成立していると考えられる。

(3) 池面の鑑賞

この行為は、浮石や浮燈籠などを配した池面を眺め、水との近接感を楽しむものである。表-1『縮景園』では、「(17)悠々亭」から烟霞島・小蓬莱などの中島が配された「濯纓池」を鑑賞していた。この「濯纓池」への視距離は約0～35mの範囲にあり、「波に揺らぐ池面の表情が視認できる限界距離¹⁹⁾」(50m)を満たしていることから、水面の揺らめきが視認できる状況にあるといえる。さらに、「濯纓池」にせり出すように建てられている「(17)悠々亭」(写真-3)を視点場とし、水面への近接性がより高められた中で、潮入りの池庭と親しんでいた。

(4) 海面の鑑賞

これは、潮の満ち引きにより多様に変化する庭外の海面を眺める行為である。表-1『養翠園』では、松林の間に海面をのぞけるとされており²⁰⁾、松の木間越しに海景を眺めていたと考える(写真-4)。その視距離は「(19)四阿」を視点場とし、松林まで6m、園外の海面まで約10～100mである。この松林までの視距離6mとは「木々を単体で視認できる単木域¹⁷⁾」(6～340m)であることから松単体を明瞭に視認できる状況にあり、さらに、海面までの視距離10～100mは「波に揺らぐ池面の表情が視認できる限界距離¹⁷⁾」(50m)を含む値である。これらより、明瞭なる松越しに海景を眺めることで、松と海とが相互に生み出す海の風情を感受することができたといえよう。

(5) 石組の鑑賞

これは、来訪者が石組の組み方や石の素材感を視認することで溪谷や滝、荒波奇する海など水辺空間を連想し、その情景を楽しむものである。表-1より『養翠園』では、「(21)養翠亭」を視点場として枯滝石組を愛でていた(写真-5)。この視距離は約45mであり、石の「素材感が視認できる限界距離¹⁷⁾」

表-1 各庭園における人と水との関わり方および「視点場」「視対象」「視距離」

利用行為	視点場	視対象	視距離(m)	人と水との関わり方の解釈	庭園名	文献	頁
建築物の鑑賞	(1) 大正記念館	中ノ島(添景)	70.0	池を介することで対岸までの見通しが良く、涼亭の添景となっていた。	清澄	4)	81
	(2) 大正記念館	涼亭	94.0	庭内の主要な建築物である涼亭とその倒景が一体となった景観を眺めを愛でていた。		4)	32
	(3) お伝え橋	中島の茶屋	84.0	お伝え橋から中島の茶屋と水面に映る倒景が一体となり創出する景観を眺めていた。	浜庭	5)	81
山並みの鑑賞	(4) 富士見山	房総の山々	約 50,000	庭園が臨海部に立地しているため、海を介することで見通しが良く、庭外景観を借景として取り入れやすかった。	浜庭	5)	84
	(5) 中島の茶屋	房総の山々				6)	228
	(6) 養翠亭	天神山(倒景)	約 840	海を介して庭外景観を借景として庭園の景観に参加させ、四季の移り変わりを鑑賞していた。	養翠	7)	15
	(7) 養翠亭	葦魚頭婆山(倒景)	約 720	庭外の山々を鏡のような池に映し出し、閑静で趣深い景観を創出していた。		8)	23
	(8) 養翠亭	雑賀崎山(倒景)	約 800		縮景	9)	27,194
	(9) 迎暉峰	似島・敵島	約 8,000(似島) 約 16,000(敵島)	視点場を高い位置に設置することで遠方への見通しを確保していた。		9)	9
	(10) 背月亭	敵島	約 16,000	海を介して庭外景観を一望することで、来訪者を楽しませていた。		9)	27
(11) 臨えい岡	敵島(借景)						
池面の鑑賞	(12) 養翠亭	大泉水(浮石)	12.8～100.0	浮石が添景として池の景観を引き立たせることで、単調な水面に変化をつけていた。	養翠	8)	24
	(13) 船着場	池	0～74.0	水面の上に張り出した船着場より、水との近接性を楽しんでいた。	清澄	4)	73
	(14) 御殿南廊下	御殿前池	11.5～27.2	視点場である御殿を高床にすることで、池への眺望を良くしていた	諸戸	10)	113
	(15) 推敲亭	杜若池	2.7～12.5			11)	6
	(16) 中島の茶屋	大泉水	10.0～76.0	浮島に立つ中島の茶屋から和歌を詠みながら、潮入りの池の眺めを愛でていた。	浜庭	12)	6
	(17) 悠々亭	濯纓池(添景)	0～35(池面) 11.9(中島)	濯纓池に烟霞島・小蓬莱など多くの中島を添景として配し水面に変化をつけていた。	縮景	9)	27
	海面の鑑賞	(18) 海手茶屋	海	20～約 28,000	海手茶屋は庭内でも海に近い位置に配され、海への眺望が恵まれていることから海景を眺めていた。	浜庭	6)
(19) 四阿		海	6(松) 10～100(海)	潮流により多様に変化する海面を松の樹間越しに眺めることで、海の風情を高めていた。	養翠	7)	15
(20) 八千代亭		紀淡海峡	約 1,700	遠方の雄大な海景が一望できることで臨海部にいることを体感させていた。	養翠	7)	16
石組の鑑賞	(21) 養翠亭	蓬莱石組 枯滝石組	45.6	視点場となる養翠亭から池を介した対岸に、滝を演出した石組を配し、愛でていた。	養翠	8)	24
	(22) 御殿	護岸石組	43.5	荒磯や滝を演出した石組を愛でていた。	諸戸	10)	43
	(23) 御殿	枯滝石組	39.7			10)	132
海の生業風景の鑑賞	(24) 迎暉峰	似島方向の帆船	約 8,000	船の往来を眺めることで海の臨場感を感じさせていた。	縮景	9)	27
	(25) 明月亭	船の往来(神田川)	16.9～88.9	ふな歌を聴くことで漁撈の風景をより一層愛でていた。		9)	28
	(26) 海手茶屋	浜庭前の海	20.0	庭内において製塩過程を作為的に演出し、来訪者に眺めさせことで海の風情を醸し出していた。	浜庭	5)	86
	(27) 海手茶屋	佃島前の海	約 1,800	庭外において漁撈の風景を作為的に演出することで、人間が海から受ける恩恵を体感させていた。		13)	44,50, 72
						14)	—

【凡例】「-」:計測不可、浜庭:「浜離宮恩賜庭園」、清澄:「清澄庭園」、諸戸:「諸戸氏庭園」、養翠:「養翠園」、縮景:「縮景園」を意味する。
【注意】1.「視点場」に示す数値は図-1「庭園配置図」に示す数値と対応。2.「文献」に示す数値は「引用・参考文献」のものに対応。

(60m)の値に含まれることから、石組の組み方や素材感まで視認できる状況にあるといえる。さらに、紀州青⁽⁴⁾と呼ばれる石を用いることで海の臨場感を高めており、来訪者に水辺を連想させることで、知的好奇心を誘発していたと考える。

(6) 海の生業風景の鑑賞

これは、来賓が訪れた際に、庭園内外において海の生業風景を作為的に創出した情景を眺める行為である。表-1より『浜離宮』の(26)(27)をみると、「(26)海手茶屋」を視点場として「浜庭前の海」での「塩釜の煙」まで約20m、「(27)佃島前面の海」での「漁撈の風景」(写真-6)まで約1800mであることがわかる。「浜庭前の海」までの視距離20mは、一般的に「親しげな距離」「顔の認識限界距離¹⁷⁾」とされる12~24mの領域内にあてはまることから、製塩作業に励む人の表情や活動景が眺められていたといえる。また、「佃島前面の海」までの視距離1800mは、人間の「視認限界距離¹⁷⁾」である1200mを超過していることから、人の活動景というよりは、むしろ船舶の往来などを眺めていたと考える。これらより、「海の生業風景の鑑賞」とは、海が人間の生活に与える恩恵を伝えるものであり、人と海との関係に深みを与えるものといえよう。

4. まとめ

本研究では、「潮入り庭園」に関する文献の分析を通じて、庭園来訪者が海の豊かさを享受していたこ

とを把握した。その手立てとしては、庭園内外の鑑賞行為を中心として、「水面の多様な表情」「海の生業風景」を楽しませるものであった。これらのことをふまえると、「潮入り庭園」からみた海の「親水」とは、水そのものに触れるものではなく、『視覚行為を中心とした海らしさの享受』にあるといえよう。その空間構成として、庭園来訪者と対象物との距離関係を整理すると、0~25mでは「水面(池面と海面)の鑑賞」、35~50mでは「石組の鑑賞」、70~100mでは「建築物の鑑賞」、500m以遠では園外の「山並みの鑑賞」としての意味を持つことが把握できた。

【補注】

- (1)「潮入り庭園」とは、『浜離宮』に代表される日本庭園のひとつの形式であり、海水または感潮域の河水を庭園の掘割や溝渠などに導き、潮の干満によって庭園内における大泉水の景観を変化させるという手法を取り入れた庭園のことである。(文献21)
- (2)全国に点在する国指定名勝庭園および都道府県指定名勝庭園より、補注(1)に示す潮入り庭園の定義に基づき抽出した庭園をさす。わが国では、研究対象である5庭園のほか、「芝離宮恩賜庭園(東京都港区)」「旧安田庭園(東京都墨田区)」「温山荘庭園(和歌山県海南市)」が現存する。
- (3)同一の対象物であっても距離関係などの違いによって、人間の身体能力から、対象物が人間にもたらす印象が異なってくるという、人間が対象物を眺める際の人間の目に備わる基本的な原則である。(文献22)
- (4)紀州青石とは、結晶片岩のひとつで緑色の美しい岩石である。磯場の波に洗われて独特の雅致をだし、日本庭園の庭石としてよく用いられる。西日本特有の岩石で関東の結晶片岩よりも色が濃いことが特徴的である。

【引用・参考文献】

- 1) 東京都港湾局:「事業概要」, 東京都, pp.169-171, 2001
- 2) 室井美美子他3名:「親水公園の空間構成に関する研究」, 日本大学理工学部学術講演会, pp.828-829, 2002.11
- 3) 四戸孝治・今井貴:「親水工学試論」, 信山社サイテック, pp.1-6, 2002.6
- 4) 北村信正:「清澄庭園」, 東京都公園協会, 1999.3
- 5) 小杉雄三:「浜離宮庭園」, 東京都公園協会, 1994.2
- 6) 東京都中央区:「中央区名所旧蹟探訪(京橋月島編)」, 東京都中央区, 1997.8
- 7) 松田茂樹:「西浜御殿と養翠園」, 1980
- 8) 田中敬忠:「紀州今昔一和歌山県の歴史と民俗」, 田中敬忠先生慌頌寿記念会, 1958.3-1966.3
- 9) 広島県教育委員会:「縮景園史」, 広島県教育委員会, 1983.4
- 10) 桑名市教育委員会:「六華園・西諸戸邸・管理・活用基本計画策定報告書」, 2003.8
- 11) 桑名市教育委員会文化財振興係:「諸戸精文庭園 -山田氏林泉-」, 桑名市教育委員会, 1991.5
- 12) 白幡洋三郎:「大名庭園 -江戸の宴-」, 講談社, 1997.8
- 13) 水谷三三:「将軍の庭 -浜離宮と幕末の風景-」, 2002.4
- 14) 尊超法親王:「浜の御苑之記」, 知恩院尊超法親王, 1842 (東京農科大学服部勉氏所蔵)
- 15) 奈良国立文化財研究所:「養翠園平面図(S 1/400)」, 奈良国立文化財研究所, 1997.3
- 16) 梅棹忠夫:「日本大地図帳」, 平凡社, p.32, 33, 48, 49, 80, 81, 86, 87, 2003.8
- 17) 鳴海邦碩・田端修・榊原和彦:「都市デザインの手法」, 学芸出版社, p.62, 1998.8
- 18) 前掲5), p.84
- 19) 長祥隆:「水辺の景観設計」, 技報堂出版, p.124, 1988.12
- 20) 前掲8), pp.44-45
- 21) 上原敬二:「造園大辞典」, 加島書店, p.352, 1978.5
- 22) 篠原修・景観デザイン研究会:「景観用語事典」, 彰国社, pp.42-43, 1998.11



写真-1 中島の茶屋とその倒景への眺め(『浜離宮』)



写真-2 養翠亭から天神山への眺め(『養翠園』)



写真-3 濯纒池にせり出す悠々亭(『縮景園』)



写真-4 四阿から大浦湾への眺め(『養翠園』)



写真-5 養翠亭から枯滝石組への眺め(『養翠園』)



写真-6 海手茶屋からの漁撈風景の絵図(『浜離宮』)(文献14)